

---

# 少女の王国

道造

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女の王国

### 【Nコード】

N1669BA

### 【作者名】

道造

### 【あらすじ】

AIRエンド後の話。

タイトル元ネタは筋肉少女帯の「少女の王国」から。

「久しぶりやな」

ウチは誰もいない部屋に向かって、声をかけた。  
当然、人に声をかけたわけではない。  
話しかけたのは、人形に、だ。

「アンタと話すのも、三年ぶりか」

観鈴の部屋。

人形で敷き詰められた、その場所に立てかけられた恐竜の人形。

……名前はなんだったか、忘れた。

観鈴がつけてくれたはずだったが。

ウチの最後のプレゼントに独り言を呟き捨てながら、ぼんぼんとその頭を叩く。

緑色の、丸い頭が手のひらに感触を伝える。

その緑色の頭をひとつ驚掴みにしながら、ぼん、とベッドの上にはおった。

そして自分もベッドに腰をかける。

痛んだ木材が、きい、と小さく悲鳴をあげた。

このベッドも、持ち主に使われなくなって三年となる。  
もう捨てなければいけないのかもしれない。

部屋を見渡しながら、思う。

「……観鈴の王国ってどこか」

ベットから見える光景には、沢山の人形が並んでいた。  
今日はあの子の三回忌だ。

主人たるあの子を、彼らが悼んであげても罰はあたらないだろう。  
騎士が姫様を愛うように、彼らは距離を置いてベットを取り囲んで  
いた。

……どすつ、と頭をベットに倒す。

最低限の掃除はしていたから、服が汚れはしまい。  
いや、汚れたところで構いはしない。

今日は一日中、家ですごす予定なのだから。

「……」

ふと、天井に向けて手を伸ばす。

あの子のいる空は遠い。

ウチの伸ばす手は、天井はおろか、あの娘の身長にも届いていない  
だろう。

その手を、そのまま横に同衾している恐竜の人形に伸ばした。

ぽーん、と放り投げ、天井すれすれの所まで届かせる。

「よつと」

だが、そこで人形の勢いは力尽き、そのまま晴子の顔まで落ちる。  
頭から落ちてきた顔を、あやうくキスしそうなところで受け止めた。

指越しでぬいぐるみの丸っこい顔と向き合い、ややふざけ気味な口  
調で語る。

「アンタ、あの子のところに行くか？」

そう、これはいい考えに違いない。

ウチは人形の頭をわしづかみにしながら、ベッドから立ち上がった。

縁側に酒瓶を。

庭にはぬいぐるみの行列を。

心地よく、きれいに並べて奉る。

「おし」

ウチは声をあげて、庭に小さな焚き火を起こした。

適当に組んだ枯れ木の中に、新聞紙の火種を放り込み。

いよいよ火が炎へと形容を変えたところで、小さな人形に手をかける。

「…………お前は、かなりの古株やつたなあ」

思いをはせつつも、すぐさま炎の中に人形を放り込む。

素面だと、どうも感傷的になっていけない。

パチパチ、と音がはじめて、人形が燃えていく。

あれは確か…………観鈴が、ウチに来た時に握っていた品だ。

セルロイドの、唯一恐竜でない女の子型の人形。

それがいびつに溶け、小さくなって灰の中へと沈んでいく。

「…………そついや、こついうもん庭で燃やしたあかんのと違つか」

ふと、漂う匂いを気にしながら思った。

どうせ田舎だ、誰も気にしまい。

一瞬で思考を切り捨て、また別の人形へと手を伸ばす。

背骨がとげとげしい、ステゴザウルスの人形。

少しサイケデリックな、黄色のプテラノドン。

弱そうないグアノドン。

たれ目のアパートサウルス。

サイズだけが無駄に大きいティラノサウルス。

幾十と、古い人形を火の中に放り込む。

一つ、一つ、とゆっくりに。

燃やす素材が悪いのか、炎が薄紫色へと変わった。

ウチはその炎を眺めながら、ただ色が戻るのを待つ。

縁側に座り、横にある酒を遠ざけながら、庭を眺めた。

「……………あ、もう最後か」

そこに並べた人形達に目をやったはずが、あるのは一体だけだ。

緑色の恐竜の頭に手を伸ばし、そっと持ち上げる。

「まあ、ファイナーレにはちょうどええか」

ウチが買った人形だった。

緑色の、丸いフォルムの……………ああ、ようやく思い出した。

プロトン君だ。

コイツの名前は、確かにプロトン君だった。  
一言だけ 観鈴がそう呼んでいたはずだ。  
あの短い夏の終わりに。

ウチはプロトン君に苦笑を投げかけながら、頭をぽふぽふと叩いた。

他の人形にも、あの子は名前をつけていたのだろうか。  
思えば、この子以外には何も知らない。  
何もなかったのだ、このプロトン君以外にプレゼントできたものは。

ウチが、買ってあげられた唯一の物。  
感傷じみて、頬擦りする。

「……………じゃあ、頼むわな」

焚き火の色は、もう赤へと戻っていた。  
ウチは立ち上がり、そこに近づき。  
子供じみた丸いフォルムの恐竜の人形に両手を添えながら、火の中  
に入れた。

火の粉が飛ぶ。  
プロトン君の小さな尻尾に火がつき、頭へと向けて赤色が移ってい  
く。

その熱の痛みに体が悲鳴をあげ、手を離れた。  
最後の恐竜は、火の中に身を落とし、全身を燃え上がらせる。

ちり、とわずかに焼けた手の甲が、赤く火照った。  
その熱とともに、ぼやり、と目がしみた。  
煙が痛い。

ウチはぐい、と二の腕で目をこすった後、もう形をとどめていない人形を見やる。

そして、それからあがる煙を見上げ、空を見た。

白い線はまるで道のように手を伸ばし、空まで届いていく。指し示すのは、雲が千切れた空の狭間。ただそこを目掛けて。

ウチはまだそこにいくことができない。

だから。

「代わりに飛んでつてくれ」

この空の果てに、少女の所まで。

「もう一度、あの子の王国を築くために」

ウチがこの人形達のように、いつかアンタの元にたどり着くまでは。もう少しだけ、待ってもらえるように。

空に心を飛ばしている間にも、日は落ちていく。

赤い色がなくなるとともに、人形が燃え尽きた。

その灰を庭に埋め、部屋に帰っていく。

煙はつつすらと雲の千切れた狭間を埋め、夕暮れが訪れる。

徐々に、人形の残り香も消えていった。

空を仰ぐ。

この空の赤い雲が、暗闇に覆われた後に。

夜になり、涙が乾いた時に。

ひっそりと。

予定通りに、ひっそりと食事をすることにしよう。

ウチは縁側に置いてあった酒を空け、一口だけそれを煽った。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1669ba/>

---

少女の王国

2012年1月4日06時45分発行